厚生省（1）

ある友人は厚生省を評して「一番厚かましく生きている官庁」と言っている。汚染血液製剤問題でそれは完全に証明された。強者には弱く弱者には強い体質は、官僚機構すべてにつきものであるが、国民の命と生活の安全を保障することを唯一の任務とするのが厚生省。だから許せない。

今、最大の国家問題は老衰者の介護である。人口論からすれば四、五十年前から警鐘は鳴らされていた。放置してここまで至らせた元凶も厚生省である。大変だ、大変だと国民不安をあおり、介護保険が唯一の方法と宣伝に夢中になっている。まさにマッチポンプ。自己責任を忘れて一番安易に国民直接負担の保険制度の導入である。長年、大蔵省に完全屈服して福祉停滞のツケを国民に回そうというのである。

その証拠を。二十年前の『厚生白書』（昭和五十二年）―「老人ホームの全定員は六十五歳以上人口の一・四五％にすぎず、欧米諸国に比して低い」。

四、五倍も低いのである。昭和三十六年で、イギリス四・五、アメリカ三・七、デ

ンマーク五・三％。日本は昭和五十二年になっても一・四％止まり。これら諸国の福祉対策はすでに整えられているので、ドイツ以外は介護保険を必要としない。

厚生省自ら厚かましくも新ゴールドプランと誇る唯一の介護施設特養ホーム増設さえも依然として一・三％に満たず、国民需要には焼け石に水である。まずゴールドプランという欺瞞を去って素直に無策をわびることから出発すべきである。きっと反論するだろう。在宅福祉（ホームヘルパー）を忘れていやしないかと。それがなおおそまつ。そのことは次回で。

（一九九六年十月二十六日）